講演者紹介

骨から見た老いと病

東京都老人総合研究所
鈴木　隆雄

現職：　東京都老人総合研究所　副所長

略歴：　1982年東京大学大学院博士課程修了，1988年札幌医大助教授，1990年東京都老人総合研究所 疫学部門研究室長，1996年同部長，2000年より現職。
1995年　東京大学大学院客員教授　現在に至る）

専門：　老年医学，骨の老化と疾病，高齢者の健康問題，古病理学

著書：　「日本人のからだ ―健康・身体データ集―」朝倉書店，1996年），「骨から見た日本人 ―古病理学が語る日本人の歴史―」講談社メチエ選書，1999年），「骨が語る ―スケルトン探偵報告書―」大修館，2000年），「老化のことを正しく知る本」共著，中経出版，2000年），「老年病の疫学　『新老年学』」共著，東大出版会，1998年），「サクセスフルエイジング」共著，ワールドプランニング，1999年），他多数

―はじめに―

この地球上で生命をえているものは、すべて病気から逃れることは不可能である。この病気というものは、健康状態からの逸脱であり、生命の証ともいうべき生体反応という生物学的過程である。私たち個人個人にとって病気は、その全生涯に精神的にも肉体的にも非常に深い影響を及ぼすことは間違いない。病気はまた、ときとして個人を超え、ある広がりをもつ地域、街、国などのレベルで流行病という形をとることもある。この流行病は短時間のうちに多数の人々を瞬時にして急性的に死にいたらしめるほどに激しく襲うこともあるし、ある地域集団に慢性的に（ときに潜在的に）日常生活に深く入りこんで、風土病という形で存在し、その地方特有の風俗、習慣を形づくっている場合すらある。しかもそれは単に肉体だけにとどまらず、時に精神的に内在する空間をも形成する。

古病理学は、このようなさまざまな時代のヒトの病気について、主に骨格を対象として、広範な角度から研究する分野である。今日のこの研究分野の特徴のひとつは、（古人骨に現れた）病変を単にその個体の病気として捉えるだけではなく、古人集団内全体における病気の生物文化的意義を解析することが盛んになってきたことである。それは、「この病気の診断はなにか？」ということから「この病気が集団内に存在する意味はなにか？」とか「この病気が集団にもたらした影響はどのようなものか？」というように、古人骨にあらわれた病変の解釈にあたって質的な変容がなされてきたということである。

シンポジウムでは第2次世界大戦後、わが国での考古学的発掘の増加に伴う古人骨資料の増加を背景として、近年本格的に研究されるようになってきた古病理学の成果を紹介しつつ、日本列島に住んできた

人々の生死病死のなかから特に「老い」と「病い」にスポットをあてて御紹介することにしよう。

―古代の人々を検診する―

ところで、古代の人々の「老い」と「病い」を考えるとき、それが我々現代日本人とは大きく異なっているのは誰でも漠然とは御理解できるであろう。古病理学の研究からもそれは間違いなく裏付けることが出来る。

確かに、現代日本人は、食生活の改善や医療技術の発達により平均寿命は著しく延ばし、長寿社会をつくりあげてきた。その一方で、過食や運動不足などのライフスタイルを基盤とする成人病（―特にガン、心疾患、脳血管障害―）により死亡する例が圧倒的に多くなっている。そのため、医療の発達した今日の日本ではガンや循環器疾患を対象とする成人病検診システムを発達させ、効果を発揮している。当然のことながら、このような検診システムは、その時代の生命をもっとも脅かす疾病に対してなされることになる。過去の時代にこのような検診システムがあったとすれば、それはどのようなものであったろうか。

縄文時代人の命を脅かす疾患は、なんといっても食物供給の不安定性からくる低栄養、今日の多くの未開発地域で頻発する寄生虫疾患、そして細菌感染であったろう。また、先に述べたように、周産期死亡や乳幼児死亡も著しく高いと推定され、妊産婦検診とあわせた乳幼児検診は大きな威力を発揮したに違いない。

次の弥生時代を特徴づける病変は、戦闘外傷である。稲作農耕による定住化と富の蓄積、さらには個人レベルでも、集団レベルでもその富の分極化が背景となり、集団間での戦闘が目立つ時代である。さらには灌漑施設をもつ水田の発達農耕活動に伴って、水田地での寄生虫疾患（日本住血吸虫など）も新たに大きな問題となってくる。実際このような寄生虫は、その後長く日本人に巣食う病気となっていくのである。

また、大陸からの多量の渡来人たちは、おそらく麻疹や天然痘のような新顔の感染症ももたらしたであろう。したがって、このような弥生時代の人々の検診システムとしては、縄文時代や弥生時代からの項目に加え、新たに麻疹や寄生虫に対するスクリーニングが有効となるであろう。その代表的な例が結核である。古墳時代は、これまでの研究から結核が人口密度の上昇を基盤として爆発的な流行を生じた時代であることが明らかとなっている。もちろん、他の弥生時代からの渡来人によってもたらされた結核以外のさまざまの感染症が、定常的に流行を繰り返す時代ともなっていったのであろう。この時代以降、特に結核は深く日本人にかかわる伝染病となる。今日のわが国での安全で安価で高度に発展をとげた成人病検診のルーツは、実は戦前からの蔓延する結核対策にあったことはよく知られているが、その結核流行のルーツは古墳時代にまで溯ることができるのである。

平安時代などでは、さらに人々の間での段級差や貧富の差が歴然としてくる。それに伴い、一部の富裕な層（例えば平安時代の貴族、藤原道長など）では、美食と運動不足による糖尿病が出現してきており、おそらく今日の日本人での成人病検診の原型が除々にできあがっていくのである。江戸時代の人骨に出現する病気はまさに多種多様である。「命長らえば病また多し」の譬え通りである。それは現代日本人の生老病死の原風景とも言える時代だったと考えている。

このように、病気は時代とともに変化し、また時代は病気に濃く彩られていることを紹介したいと考えている。